

『トラブルにあったときこそ、人生のターニングポイント』



東京-横浜27km踏破！

暴走幼少機関車

この頃は暴走機関車時代。電車が好きで、「○○の車両じゃないと乗らない」「各駅停車じゃないと乗らない」とかこだわりが強かった。その車両が来るまで運が悪いと1時間くらい待つことも。「しょうがない、子どもはそういうもの」と、母はいつも待ってくれた。他にも「外食は絶対行かない」とか色々こだわりがあって、お母さんは探り探りで大変だったらしい。そんな感じが小5くらいまで続いた。

お父さんは出張であまり家にはいなかった。出張先で美味しいものを食べてきたり、自由にのびのび仕事していたイメージ。お父さんは柔道がすごく強くて、叔父も道場の先生。そんな環境で育ったけど、お父さんは自分にも「柔道やらないか」とは一度も言わなかった。自分にとってはそれが一番の救い。学校の成績表とかも全く見なかった。あれこれ口出しせず見守ってくれたのが、いま思うと本当にありがたかった。

暗黒小学生時代

最初あまり行きたくない時期もあったけど、小2の時の担任の先生がすごく優しい先生で、そのころは皆勤賞。ホームみたいな感じで安心できた。

3~4年生が第一次暗黒期。担任が最悪な先生で、理不尽に怒る人。学校に行きたくなかったけど、その時はその原因がまだわかっていなかった。自分はその学校しか知らなかったから。他の学校よりはマシなのかな、とか思っていた。だから親にも行きたくないことを言っていなかった。

あとは、給食の時間が本当に嫌だった。偏食マンで、野菜がすごく嫌い。給食でサラダ盛りとか玉ねぎとか、食べられないものが色々あったけど、当時は無理やり食べさせられて。それが本当につらかった。結果的に、母が先生の悪行をして、先生に「それはおかしい」と言ってくれたそう。その時は母と先生で口論にまでなって、最後には父も出てきて先生を制圧できたらしい。そんなことがあった事実を知ったのは、自分が高1の時だった。

そんなにつらかったけど転校しなかったのは、学校の友人と仲が良かったから。幼稚園の時から付き合い。あとは5~6年生の担任の先生はマシな先生に代わり、面白い先生で自分は仲が良かった。学園祭とか給食のカレーとか、学校で楽しみなこともあった。

小5くらいの時、母の勧めで劇団での演劇の体験に参加、入団した。劇団のスタッフ（シマケン）と「戦い」ごっこをしに行くのが楽しみだった。シマケン戦い期。それから気づいたら入団して7年。ずっと頑張ろう、と思って続けてきたんじゃないって、気づいたら7年、というのが大事だと思う。（テレビ番組「もしもツアーズ」も、それで20年間続いた。）

ティーンズに通い始めたのは小4の頃。小学校時代の同級生で、ティーンズにも通っている子が一人いた。その子は学校で、自分の言いたいことを何でも言うタイプ。自分と真逆なタイプで、初めは「何だこいつは」と思っていたけど、今思い返すと彼の伝えていたことは、「今の自分のできないことをはっきり伝える」という意味では正解だったのかもしれない。彼との出会いや演劇への参加が、自分にとってターニングポイントだったのかもしれない。習い事に恵まれて、理不尽なことを怒る人もいなくて、この頃からは前向きに楽しく過ごせるようになった。厳しくされるより優しく後押ししてもらえるほうが、「頑張ろう」となるタイプなんだと思う。

逆転の兆しの中学校時代

第二暗黒期。中学は知り合いがいない学校に入って、慣れない環境で気持ちが一気に落ちた。このころは今とは真逆で内気な性格。1年でいじめもあり、2か月くらい不登校に。親に「行きたくない」と言ったら、いいよ、と全て理解してくれた。家ではずっとテレビを見て過ごしていた。その時ハマったのが、「有吉ゼミ」の大食いと「クイズ！ドレミファドン」。録画をリピートして何回も観た。テレビが大好きになったきっかけ。テレビは小さい時からドラゴンボールとか、好きな番組は必ず観ていた。

学校に行ったときはほとんど廊下の席で過ごしていて、同じように教室に入れない生徒と話したりしていた。その時に、やっぱり人と関わるのっていいなと感じた。

中2くらいでまた教室に行けるようにもなり、仲良くなった人もいた。中2の4月くらいからN中に入学。元の学校に所属はしていたけど、N中でずっと過ごしていた。すごく居心地がよかった。学校で何かつらい経験をした人たちが集まっていたから、親近感があった。N中は最初親が探してきてくれて、どんな学校か分からないから自分は行くのを拒否していた。でも実際通ったら居心地がよくて、そのまま通い始めた。中2の時の学園祭で、自分の好きなテーマでクイズを発表。いい思い出になった。もう一つの思い出は、初のAKB劇場。劇場ならではの良さがある。自分にとっては神の聖地で、入ると特別感。

中3の時はコロナで外に出れなかったり劇場にも行けず気持ちが落ちていたけど、コロナが解除されてまた友達とも会えるようになって嬉しかった。中3の学園祭ではドラマを制作。脚本、役者、演出すべてひとりで行った。学園祭当日に実際に自分のつくったドラマが流れて、「観てもらってる！！」というのが嬉しかった。演出をやってみて、「自分は教えるのが下手だな」ということにも気づいた。自分は感覚派で、教えるのは向いてない。でも逆に感覚で何かを作ったり演じたりするのが向いている、と分かった。中3の時には週1で元の学校にも行って、フリースペースでのんびりしたり、少し友達と話したりしていた。

大逆転の高校時代

N高に進学。中2で入った時から、高校はN高に進学しようと思っていた。いろんな人と交流したいから、週5日通うコースにした。中学との大きな違いは、単位取得のためのレポートが始まったことくらい。レポートは自分は苦ではなかった。「進めるしかない」という感じ。内容もものすごく難しいわけじゃなく、ゆるいから大丈夫だった。

高1のとき。キャンパスフェスティバルの出演枠をもらった。パクリたい1グランプリにひとりで行って出演。無茶苦茶楽しかった。前日リハーサルで先輩と関わったりしたのも楽しかった。開催後は焼肉で打ち上げ。実行委員の人と話したり、みんなで関わるのが楽しかった。

高2は色々挑戦した。新入生向けのパソコンオリエンテーションのボランティアと、オープンキャンパスの実行委員に立候補。興味があったから参加した。楽しかった。教えるのはそんな得意じゃないけど、新入生とかいろんな人と交流ができたから。他の人の話を聞くのは面白い。他にも、ハロウィンイベントで脱出ゲームの準備、キャンパスフェスティバルでは実行委員を担当。時期が重なってすごく忙しかった。一緒に参加している友人と話すのが楽しかったから、苦ではなかった。焼肉打ち上げと、二次会のスポッチャもいい思い出。

高3は春に、磁石祭、劇団の舞台公演、パソコンオリエンテーション、校外学習、全て時期が重なって多忙を極めた。やりたかったことができて満足。夏の舞台、秋もキャンフェス、冬はクリスマスパーティとイベント尽くし。

高校生活で大変だったことはレポート。「レポートは必ず学校の授業中にやる、家では学習はぜったいしない」と自分のルールを決めていた。それが、イベントが忙しくてもレポートと両立できた秘訣だったと思う。

高3のとき、学校の一部の先生との関わりが面倒で、行かない授業もあった。でも担任の先生がいい人で、そのことを相談できた。自分から相談しにいった。自分はそもそも普段あまり怒ることがないから相談をしないタイプだけど、その時は相談できた。あとは友人と会うのが楽しみで学校に行けた。

両親との関わりも小さいころとあまり変わらず。学園祭とかは、気が散っちゃうといけなから「観に来ないで！」と事前に言っていたけど、それも全て理解してくれた。

